

## 家庭科教員のジェンダー平等教育への意識からみられる学校課題

著者：齋藤美重子\*<sup>1</sup> 望月一枝\*<sup>2</sup> 阿部睦子\*<sup>3</sup> 川村めぐみ\*<sup>4</sup>

所属：\* 1 川村学園女子大学  
\* 2 日本女子大学（客員研究員）  
\* 3 東京学芸大学（非）  
\* 4 岩手大学

英文タイトル：

The Study of Home Economics Teachers' Perceptions regarding Gender Equality Education

英文著者：Mieko SAITO, Kazue MOCHIZUKI, Mutsuko ABE, Megumi KAWAMURA

英文所属：

\* 1 Kawamura Gakuen Woman's University  
\* 2 Japan Women's University(visiting scholar)  
\* 3 Tokyo Gakugei University(part-time lecturer)  
\* 4 Iwate University

### 要旨

本研究では現職家庭科教員にジェンダー平等教育に対してヒアリング調査を行い、学校教育現場の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

その結果、家庭科教員は生徒に対してジェンダー・センシティブな配慮をし、最終的には生徒自身の生き方を考えさせる家庭科授業を行おうとしていたことが明らかになった。また、学校文化の違いにより家庭科教員のジェンダー平等教育を行う困難さが確認された。今後学校全体にジェンダー平等意識を共有できる環境が求められる。

キーワード：

ジェンダー平等 家庭科 学校文化 高等学校 ヒアリング調査

## 1. 問題の所在と研究目的

日本における2025年のジェンダー・ギャップ指数(Gender Gap Index: GGI)の総合スコアは、0.666であり、順位は146か国中118位、政治参画および経済参画の分野で特に低かった(World Economic Forum: WEF, 2025)<sup>1)</sup>。健康、知識、生活水準における男女格差を測定するジェンダー開発指数(GDI)では、193か国中89位、ジェンダー不平等指数(GII)は172か国中22位であった(UNDP, 2025)<sup>2)</sup>。ジェンダー不平等指数は、リプロダクティブ・ヘルス、エンパワーメント、労働市場への参加における不平等を示すものである。また、国連女性差別撤廃条約の実施状況についての総括所見(2024.10.29発表)では、マイノリティ女性への差別のほか、賃金のジェンダー格差、教育機会のジェンダー格差、包括的性教育の不足などが指摘された<sup>3)</sup>。いずれにしても日本はジェンダー平等社会とは言い難い状況であり、ジェンダー平等に向けた教育は内外から求められる喫緊の課題である。

戦後、家庭の民主化を目指して家庭科が創設された(文部省, 1947)<sup>4)</sup>。堀内(2001)は「家庭科教師である」ことは「ジェンダー・センシティブな生き方の体現者として、子どもたちの前に現れること」とした<sup>5)</sup>。荒井ら(1998)は高等学校男女必修後の1995年に全国9都道府県の高等学校家庭科担当教員と家庭科外担当教員を対象に質問紙調査を行い、家庭科教員が家庭科外教員に比べジェンダー・フリーな意識が高く、実践場面においても、生徒の性別役割にとらわれない意識を育てようとする意欲が高いことを明らかにした<sup>6)</sup>。しかし、家族学習に対して家庭科教員は生徒へのプライバシーを配慮するがために「倫理的な指導不安」があることが指摘された(片田江, 2014)<sup>7)</sup>。木村(1999, 2022)は現在の学校にも残る「かくれたカリキュラム」を指摘し、中等教育段階のジェンダー平等教育の重要性が示された<sup>8)9)</sup>。荒井ら(1998)の調査後、ジェンダー・フリー・バッシングを経て20年以上経過し、齋藤ら(2022)<sup>10)</sup>は日本家庭科教育学会第5次課題研究グループとして、ジェンダー平等の家庭科教育実践に役立つガイドブックを作成した。果たして現在も学校現場にはジェンダー平等に対する漠然とした忌避感や、生徒からの反発に対する不安感などがあるのだろうか。

そこで、本研究では生活していくことをテーマに授業を行っている家庭科に焦点をあて、現職家庭科教員へのヒアリング調査をもとに、家庭科教員のジェンダー平等教育に対する意識の共通性と差異を各学校との関係性から明らかにし、ジェンダー平等社会に向けて、学校教育現場の課題に示唆を得ることを目的にする。

## 2. 調査対象と方法

### (1) 調査対象

表1 対象者インタビュー・インタビュアーの属性

	A	B	C	D	E
インタビュー	県立高校 30代女性	県立高校 50代女性	私立中学・高校 30代女性	県立高校 30代男性	私立中学・高校 40代男性
	F	G	H	I	
インタビュアー	教員歴 21年 70代女性	教員歴 17年 60代女性	教員歴 19年 60代女性	教員歴 7年 50代女性	

※インタビュアーF～Iは2024年度までの非常勤を含めた大学での教員歴であり、中学校・高等学校における教員歴を含まない。

本調査では家庭科教員歴10年以上で、学校内で中核として教員間の信頼を得て授業を行っている教員を対象とした。県立高等学校の女性教員2人(A・30代、B・50代)、私立中学・高等学校の女性教員1人(C・30代)、県立高等学校の男性教員1人(D・30代)、私立中学・高等学校の男性教員1人(E・40代)の計5人である(表1)。Polkinghorne(1989)は対象者の選定には研究主題の経験を持っていることをあげ、調査対象者の人数や代表性は問うていない<sup>11)</sup>。Merriam(1998)は具体的普遍性について、少人数の対象者という特殊の中に宿る普遍性を指摘した<sup>12)</sup>。やまだ(2007)はナラティブとは経験を有機的に組織化し意味づける「意味の行為」であり、2つ以上の事象を結びつけ意味の変容あるいは生成が本質的に重要であるとした<sup>13)</sup>。本研究においてもこれらをもとに、ヒアリング調査はインタビュアーも家庭科教員歴のある研究者で、全員が応答しながら、具体的に経験したこと、見たこと、思ったことを語ってもらうよう心がけた。

なお、本調査においては日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会(課題番号592号)の承認を受けている。

### (2) 調査方法

ヒアリング調査期間は2022年11月～2022年12月で、Aは11月22日、Dは11月27日、Eは12月27日、BとCは各教員の日程の都合上一緒に12月28日に行った。それぞれzoomを使用したオンラインで半構造化面接法によって、主に以下の項目について各教員に質問し、自分自身の家庭科教員としてのライフストーリーを語ってもらった。

#### ■主な質問項目

- ①ジェンダー平等に対してどのような思いを持っているか
- ②ジェンダー平等に対してどのような授業を行っているか

調査はICレコーダーに録音し、文字起こしをして分析した。計量テキスト分析ソフトKH Coder (Version3) (樋口, 2017)<sup>14)</sup>を用い、頻出語を検索、共起ネットワークに

よる分析を行い、コード化した。それに基づきナラティブの内容分析を行い、家庭科教員のジェンダー平等教育に対する意識と学校との関係性から課題を探った。

### 3. 結果及び考察

#### (1) 共起ネットワークによる結果及び考察

県立高校教員 A とインタビューー3 人 (F、G、H) 計 4 人の対話は 2022 年 11 月 22 日に行い、総抽出語数は 16234 語であった。最小出現語数 10、描画する共起関係上位 60 の共起ネットワークを図 1 に示す。県立高校教員 D とインタビューー4 人 (F、G、H、I) 計 5 人との対話は 2022 年 11 月 27 日に行い、総抽出語数は 18492 語で、最小出現語数 10、描画する共起関係上位 60 の共起ネットワークは図 2 に示す。私立高校教員 E とインタビューー3 人 (F、G、H) 計 4 人との対話は 2022 年 12 月 27 日に行い、総抽出語数 14034 語で、最小出現語数 10、描画する共起関係上位 60 の共起ネットワークは図 3 に示す。県立高校教員 B と私立高校教員 C、インタビューー4 人 (F、G、H、I) 計 6 人の対話は 2022 年 12 月 28 日に行い、総抽出語数 15358 語、最小出現語数 10、描画する共起関係上位 60 の共起ネットワークは図 4 に示す。

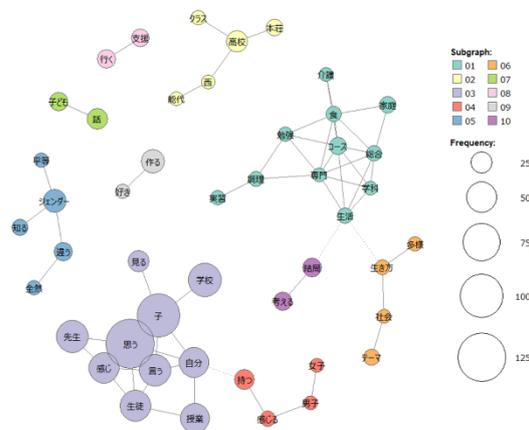


図 1 A, F, G, H の共起ネットワーク

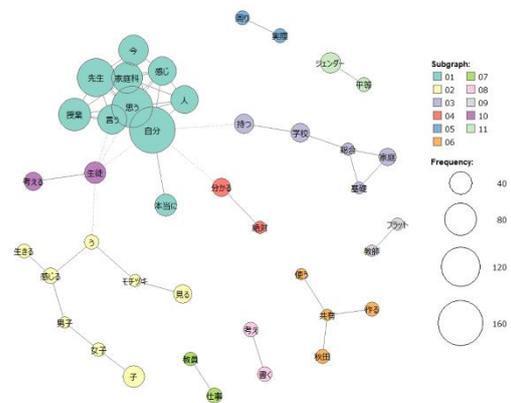


図 2 D, F, G, H の共起ネットワーク

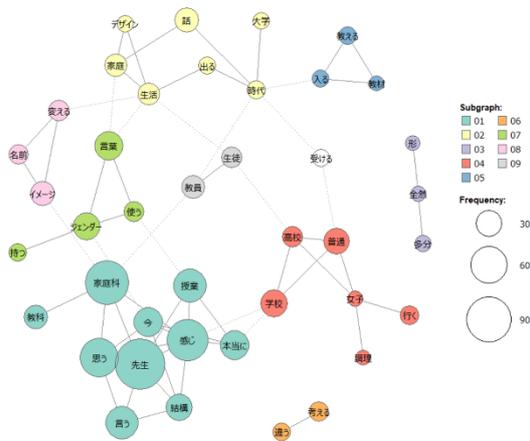


図3 E, F, G, H の共起ネットワーク

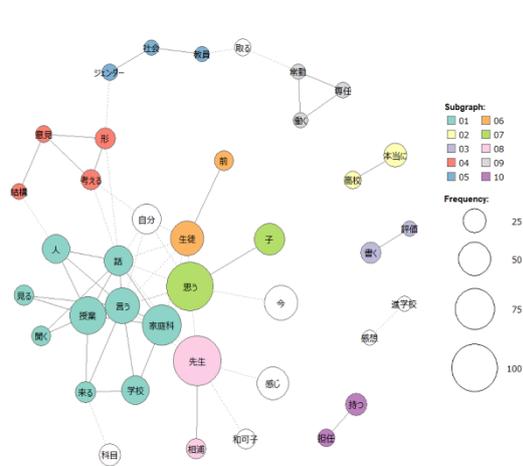


図4 B, C, F, G, H の共起ネットワーク

まず、抽出語の頻度が多かった共起関係をみていく。図1では、「先生」と「思う」「感じ」が繋がり「感じ」は「生徒」「言う」「子」「自分」との繋がりがあった。図2では「先生」「家庭科」が重なり、「授業」「言う」「思う」「自分」「感じ」に繋がっていた。図3では「先生」が「家庭科」「思う」と繋がっていた。図4では、「先生」と「思う」が繋がり、「家庭科」「言う」「感じ」が繋がっていた。要するに、先生の思いが共通項として表出した。

次に、抽出語の頻度が中程度の共起関係をみると、図1では「コース」が「専門」「総合」「食」「生活」とつながっていた。図2では「総合」「基礎」「家庭」と「学校」が繋がっていた。図3では「家庭」「生活」「デザイン」と結ばれ、「普通」「高校」「学校」「女子」の結びつきがあった。図4では抽出語の頻度は小さいものだが、「進学校」「感想」の結びつきがあった。高等学校普通科の「家庭」に関する科目には「家庭基礎」(2単位)、「家庭総合」(4単位)があり、どちらか1科目を各学校が選択できる。また、専門学科において開設される「家庭」に関する学科は食物科、服飾科、生活デザイン科、保育科などさまざまである。つまり、各学校別の内容が語られたということである。

図1～図4までの共通点として、「先生としての思い」が語られたことが確認された。他方、相違点として単位数の違いや学科別、進学先等、各高等学校の独自性を意識した発言がみられたことが確認された。

## (2) ナラティブの内容分析

図1～図4より、「家庭科教員としてのジェンダー平等教育に対する思い」と「各高等学校の独自性」にコード化された。各コードに基づき代表的な対話を抽出し、ナラティブの内容分析を行った。

## 1) 家庭科教員としてジェンダー平等教育に対する思い

ジェンダー平等教育に関してあまりやっていないと語った A の発言に対してさらに質問すると、「性について考えてみよう」というテーマで毎年行っているが、「人口減少」や「少子高齢化」などの話になると、自分の「軸が見いだせない」と述べた（トランスクリプト I）。また、性の多様性について、生徒は「フラットにしていくものなんだ」とわかっているからあまり授業でやっていないという発言もあった。しかし、A はこれからの授業について、「いろんな生き方がある。こんな生き方をしている人もいる」というさまざまな生き方を提示し、「ほかの分野」とも関連づけ、「多様性を知って、じゃあ自分はどうするのか。何を選ぶのかを考えられるもの」にしたいと語った（トランスクリプト II）。多様性があるというだけの授業の終わらせ方ではなく、その先も考えさせる授業を検討していた。つまり、多様性の知識を得たうえで他分野とも関連させ、選択肢が様々あることを学び、自分の価値観や生き方を考えられる授業にしたいと願っていたことが確認された。

D も生徒に対して「考え方が柔軟で受け入れやすい」と語り、「性的マイノリティ」に関してフラットに考えていると感じ、授業では「価値観の押しつけにならないように」「押しつけがましかったりすると、ちょっと嫌がるやつもいるよなと思って」配慮しながら行っていたことが確認された。生徒の中にはジェンダーという言葉に対する忌避感があることが窺えた。

トランスクリプト I、II、III にみられるように、A、D ともに、生徒が「性の多様性」に対する理解があることをあげ、特にジェンダー平等を前面に押し出した授業は行っていなかった。A の「軸が、自分が見いだせない」の発言には自分自身の生き方に真摯に向き合い悩んでいる様子が窺える。D は「価値観の押しつけ」にならないように配慮していたことが確認された（トランスクリプト III）。A、D ともに、社会に対しても生徒に対しても自分自身に対しても、ジェンダー・センシティブであり、ジェンダー平等教育を目立たぬよう、しかも生徒の意見に応答しながら行っていた。つまり、家庭科教員は、ジェンダー平等について言うまでもないことを今更何を言っているんだといった鬱陶しさを感じている生徒がいることを意識しつつジェンダー平等教育を行っていたということである。

トランスクリプト IV より、E は「本当に男社会だったんで、これは絶対ジェンダーという言葉、これ絶対使ったらやばいな」と、周りの環境を意識して、「ジェンダーという言葉を使わずに済むような教材を設定して、でも、流れはジェンダーを意識させる」というジェンダーの単語を使わずにジェンダーについて考えさせる教材の工夫をしていたことが確認された。また、「2 学期の保育と家族と高齢者、全体がジェンダーだっていうふうな意識で作っている」とし、期間全体を通したジェンダー平等授業を行っていたことが確認された。さらに、E は「家庭科に変な偏見みたいなのを持たれちゃうのが、その生徒にそれを学ぶ生徒にとって不幸だな」と思い、なるべくニュートラルに生

活を考えさせていこうとしていた（トランスクリプトV）。いまだに生徒の中にあるジェンダーという言葉に対する鬱陶しさや煩わしさを感じ取っていたことがわかる。この学校でもジェンダー平等教育に対する忌避感が生徒にあったということである。Eは「僕の存在自体がジェンダー」として男性家庭科教員というレッテル貼りを逆手にとって、これからもあえてジェンダーという言葉を使わずに、政治的に絡めとられることがないようにしていくということであった（トランスクリプトV）。それが生徒の学びを促進させ、将来の生徒の生活にも生かせると考えていた。家庭科男性教員であることがいまだに生徒・保護者・学校全体の認識として珍しいと思われている表れであった。あえてジェンダーという言葉を使わずとも、仮に生徒自身が家庭科男性教員は珍しいと感じれば、生徒自身の内にあるジェンダーに気づくことができると考えていた。Eはまさに「ジェンダー・センシティブな生き方の体現者」であることが窺えた。このように、EもA、Dとともに、ジェンダーに対する鬱陶しさ、忌避感が生徒の中にあることを認識し、表面上はジェンダーという言葉を使わずにジェンダー平等教育を行っていたことが確認された。

B、Cはともに、「特別これがジェンダーの授業ですっていうのはないんですけども、各所にエッセンス的に散りばめている」と語り、特別なジェンダー平等授業を行っていないが、「選択的夫婦別姓」「事実婚」「育児休業」「給与格差」など内容ごとにジェンダー平等を意識させる授業を行っていた。Cは「この先生はこういう感じだから、そのとき、うんうんって言っとけばいいんだよみたいな感じになっちゃうのもよくないな」と考え、「こういう意見もあるけど、こういう意見もあるよね」と、教員がある特定の思想を持っているといった偏見を持たれぬよう配慮して、授業の中で生徒個々人の意見が表明できるよう工夫していたことが確認された（トランスクリプトVI）。

Dは「自己開示をたくさんしていったほうが、すごく距離も近くなれるし、フラットに意見をいってくれる」「人と人としてしゃべれるっていうのが家庭科のすごくいいところ」と語り、家庭科教員に自己開示の必要性和、人間同士の相互作用の中で考えることができる家庭科の良さを述べた（トランスクリプトVII）。自分自身と向き合い、先が見えず悩んでいるがゆえに生徒の前で自己開示ができないAと対照的であった。生徒からの反発を受けないように授業を行っていたCだったが、「やっぱり自分の意見を言わないと、生徒の腑に落ちない」と同じ学校の先輩教員からの助言を受けて、自己開示するようになったと語った（トランスクリプトVI）。つまり、Cの自己開示には共感してくれる同僚がいて、心理的安全性が確保されていたことが窺えた。

自分自身と向き合い先が見えず悩んでいるがゆえに生徒の前で自己開示ができないAと対照的に自己開示をすべきとしたDとの差異についてCの発言から考察すると、Aが自己開示できなかった背景には同僚との意見の相違（トランスクリプトX）、学校環境に声をあげられる心理的安全性がなかったことが一因と考えられる。

小括すると、共通点として、A～Eの全家庭科教員は「ジェンダー・センシティブな生

き方の体現者」であった。また、A～Eの全家庭科教員は生徒の中にジェンダーという言葉に対して忌避感を持つ者がいることを感じていた。そのためジェンダー平等を表立って語ることなく、ジェンダー平等に資する教育を行い、自分ごとにした生活を考えさせ、生きていくための授業をしようとしていたことが確認された。家庭科教員はジェンダー平等教育に対し、生徒にも同僚にも配慮しながら、ジェンダーという言葉を使わずにジェンダー平等に資する教育を授業全体を通して行っていたことが明らかになった。つまり、表面的にはわかりにくいのが、ジェンダー平等教育を粛々と遂行していたといえる。こうした教員の生徒や授業に対する姿勢は、生徒が自然体でジェンダー平等を生活に根付かせることを可能にすると考えられる。

家庭科教員の自己開示が家庭科授業に生徒の参画を促し、生徒の率直な思いを自由に発言させることに繋がることを主張したDやCに対し、自己開示に否定的なA、B、Eも、一見逆な発言をしているようでありながら、ジェンダー・センシティブであるがゆえに、周囲の環境を意識したものであることが示唆された。

## 2) 各高等学校の独自性

トランスクリプトVに続けてCは生徒たちが変わってきたことに関して、トランスクリプトVIIIでは「同僚」の変化に影響を受けて「子どもたちが変わる」とし、「市民権」を得てきたと述べた。教員や学校文化の変化が子どもに影響を与えていることを語った。Cの奮闘が同僚教員のジェンダー平等に対する意識変容や、家庭科の重要性に対する認識の変化を促したことが窺える。同僚教員を含め学校全体のジェンダー平等に対する認識が生徒たちの意識変容にも影響を及ぼすことが示唆された。

Dは公立高校において、普通科、総合学科(専門学科)との違いを経験し、1年目は「ずっと迷いながらやって」おり、次の高校ではジェンダーに触れられない学校であったことを語った。教員として行いたい授業と学校が求める授業との間で葛藤する様子がみられた。第3番目に赴任したO高校では「好きなように授業構成」ができたと述べ、各学校における独自性を感じた発言があった(トランスクリプトIX)。O高校では「いろんな角度から、じゃ、これはどうなんですかとか、そういう新しい質問とか、新しい考え方とか、見方っていうのが出てきて、すごいやりがいがありました」と語り、教員としてのやりがいを感じていた。言い換えれば、各高等学校の学校文化が教員の行いたい授業を妨げていることがわかる。

Aは生徒が「デリカシーがなかったりとか、必要以上になれなれしく踏み込んできたりして嫌な思いもした」ことを明かし、生徒との距離感の難しさをあげた(トランスクリプトX)。また、「突き詰めて一緒に何か探求していると、なんか難しいなと思います」とも語り、Aは家庭科教員に求められる自分の生き方をさらけ出すことへの葛藤を言葉にした。また、「生徒会の先生とかが、ジェンダー平等をテーマとした動画を生徒たちが作ろうとする際に止める」のを目の当たりにし、同僚や学校が求めるものと生徒との

間でのギャップを感じ、生徒に寄り添いたい自分との間で揺れ動いている様子が見られた。Aは学校による生徒たちの違いや、生徒と教員が考えるジェンダー平等に対する考え方の違いについて語ったのである。

トランスクリプトⅧ、Ⅸ、Ⅹより、各学校による違いが明らかになった。教員のジェンダー平等教育への困難さは各学校事情にあったといえる。教職員を含め学校全体がジェンダーセンシティブであれば、生徒の中にあるジェンダー平等に対する鬱陶しさや偏見も払拭されていくことが示唆された。

また、A～Eの教員は各生徒に応じて授業内容にも配慮していることがわかった。進学校には教員の思いを汲んで自身の正直な思いを吐き出せない生徒がおり、一方で困難校には教員の言葉が響かない生徒がおり、それぞれの教員の苦悩がみられた。高等学校は偏差値により学校間の違いは大きく、各高等学校でそれぞれの雰囲気や地域性がある。教員は学校間移動のたびに、生徒や保護者の特徴を把握して生徒の本音を引き出せるよう配慮し苦心していた。

換言すれば、普通科進学校、就職実績の高い高等学校、あるいは専門学科の食物科、生活デザイン科等により、学校文化は異なり、教員は各学校の目の前の生徒をよく見、考え、配慮して生徒の成長を願って、生徒に適応したジェンダー平等教育を行うことを意識していたといえる。また、同僚性を育んでいた教員は自己開示がしやすくなっていたが、教員間のジェンダー平等に対する認識のずれがある場合には難しいことが窺えた。さらに、生徒の忌避感、他教員の忌避感、生徒と他教員とのジェンダー平等に対する意識の違いもあり、ジェンダー平等の統一指針の必要性が示唆された。

つまり、A～Eの家庭科教員の自己開示の有無は教員個人の特性というよりも、各学校の生徒の様子や学校文化―学校内の公平性・対話のある環境・地域性―に大きく左右されることが窺えた。

## トランスクリプト I

<p>H: 今現在、A先生が、ジェンダー平等に関わっているような授業、こんな感じでやっているよみたいなものがありますか。</p> <p>A: 社会問題について考えていくと、結局そこに行きついたらなってしまうパターン。さっきの探究の時間とか、地域活性化だとか人口減少だとかというのをやっていくと、行き着いた感じが。やっぱり自分からあまり。でも、家庭総合の中で、<u>自分の性について考えようみたいなところ</u>のときに、メインでそういう話をしていくことはありますね。それはまず、毎年やるかな。</p> <p>H: あんまりやらないっていうのは、それは生徒のことを考えて、これはやらないほうがいくなって思っているからなのか、もう今の時代に合わないなと思って、そういう授業はやらないと思っているからなのか、どうい感情がありますか。</p> <p>A: それこそ、本当に自分の意思で、そんなに熱心に発信していないっていうのは、生徒たち、私もそうですが、生徒たちにとっても、ジェンダーとか LGBT がいろいろあるっていうことは、もういっぱい知っている。ネットとかのものでもそうなんでしょうけど、とにかくそういうものは、<u>フラットにしていけるものなんだ</u>っていうの、もうだいぶ分かってきて過している。わざわざどこから提示するネタが、古いときだっていっぱいあるわけですから。わざわざ言わなくても、もうみんな知っているよなって感じしますね。</p> <p>H: 知っているけど、今ジェンダー平等指数とか、世界的に見て低いじゃないですか。それとかについては、知っているだけでいいですかね。</p> <p>A: 私が、知っているよなって思っているの、<u>いろんな性のあり方があるところを彼らは知っていたりかかっている</u>感じで。それがじゃあ、<u>その人の生き方であったりとか、ジェンダーとか、自分の性に疑問を持っていない人たちのほうが、そういう自分はノーマルだと思ってる人のほうが生き方的には、結局、ジェンダーの差がある昔ながらの生活とか生き方とかに疑問を持っていないことになりそうだから</u>。それを私は、こうやって今、考えながらしゃべっていますが、これを授業で考えさせる、問かけるところまでというのは、いつもやっていないですね。何でやるのを避けてしまうんだろうと思うと、結局、自分が、こうしていったらいいね、<u>こうなっていくらいいかって軸が、自分が見いだせない</u>とか。さっきの人口減少とか、少子高齢化とかの話もそうなんですけど、自分がもう、どん詰まっているじゃん、この社会で思っているの。</p>
---

※以下、トランスクリプト下線部筆者

## トランスクリプト II

<p>H: これからとか、こういう授業がしてみたいとか、こういうふうにやっていきたいとかっていう授業とかありますか。</p> <p>A: できるようになりたいと思うのが、どの分野でも、特に生き方とか、青年期とか、家族のあり方とかでも、<u>多様性を認め合おうね</u>で終わるだけじゃないものをやれるようになりたいと思います。</p> <p>H: 多様性を認めるの先は、何ですかね。</p> <p>A: 何ですかね。結局、多様性があるね、別に授業が深まっていなくても、結局、締め言葉でいつでも使えちゃうから。家庭基礎のたった1、2時間、何か一つのことをやったとか、1時間にいろんなネタをただ乱雑にぶちこんだものでも、多様性があるねって言って終われちゃうから。薄い授業のまとめ、あるあるみたいな感じになっているので。本当は、できるんだったら、<u>いろんな生き方がある、こんな生き方をしている人もいる</u>とかっていう、生徒のネットとか普段の生活では見たことがない生き方、いろんなものを提示したりして、感じたこともそうだし、<u>いろんなほかの分野と混ぜて</u>。結局、じゃあ自分は、<u>どんな家を選んでいきたいんだろうとか、じゃあ自分は</u>どうする、自分の価値観はこれっぽい、今の段階では。だから、<u>今の価値観</u>だったら、自分は今、大人になつたらとか、このとき、<u>こう選んでいきたい</u>とかっていうような。人生にこんな選択肢があったりとかっていうのをやればいいのかと思う。多様性を知って、<u>じゃあ自分は</u>どうするのか。何を<b>選ぶのか</b>を考えられるもの、授業とかやれたらいいと思います。</p>
--

### トランスクリプトⅢ

H:ジェンダー平等とかって、D先生はどうふうに思ってるんですか。

D:自分はもちろん必要なことだと思いますし、でも、もうだいぶ社会にも生徒にも浸透してきているってうか、今の高校生とかのほうが、逆に考え方が柔軟で受け入れやすいのかなって感じはします。生徒が見ている YouTube とか、そういうメディアの中でも、そういう性的マイリティーの方々がいっぱいいるみたいで、すんなり今までの日本がおかしいはねみたいなそういう考え方をする子が多いので。結構みんなフラットな感じで受け入れられるので、そこはいいなと思っていますが。あんまり、こういう考え方が大事だよなとか、こういう考え方が正解だよなっていうような価値観の押しつけにならないにはするので。結構いろんな意見を、大体はジェンダーってうか、男らしさと女らしさを個人に求めるのは、あんまよくないよなとかっていう意見になってくるんですけど。たまにそういうこと、ジェンダーとかってよくない部分もあるけど、これ見よがしにマイリティーの人たちが、自分の権利ばかり主張するのはおかしいと思うとか、そういう意見が来たりすると、まあ、そだよなと思って。ただ、それに対してあんまり、そのまんまで終わる、オープンエンドで終わっちゃっているってうか。それ以降、何かもって持っていたほうがいいのかとかって、考えをもっと深めるような場面を設けたほうがいいのかとかって思いながら流しちゃっているんですけど。自分もずっとやってきていることなので、普通になってきているってうか、あんまり特別視していないってうか。実際そんな感じですか。

H:特別視していないということですが。しかしジェンダー平等指数とか、日本はずごく低いですよ。でも、フラットな感じってうか、みんなにジェンダー平等は浸透しているって感じのまんまでいけばいいんですかね。

D:自分が、生徒がフラットに受け入れられるっていうのは、ジェンダー全体じゃなくて、性的マイリティーとかそういうことに関してです。確かに、日本の実情、男女でのいろんなジェンダーによる差っていうのは、自分もデータとして具体的なデータを用いてあげて、それがまた、ジェンダーに固執するのはよくないなっていうような考え、そういう知識は授けることは大切だなんて思っています。重要視していないっていうと語弊があるかもしれないですけど。何て言うんですか、あんまりうるさくないってうか。ジェンダー、ジェンダー、ジェンダーは駄目駄目みたいな。今フェミニズムとかもいろいろたたかれていますけど。うるさくなりすぎないようってうか、何ていうんですかね。自分の伝え方があれなんですけど、押しつけがましかつたりすると、ちょっと嫌がるやつもいるよなと思って。そういうスタンスでやっています。

### トランスクリプトⅣ

H:教材ってどうやって探してくるんですか、どう気持ちってうか、どう意図で見つけてくるのかな？

E:昔、大学院時代に、恩師の先生に、ジェンダーという言葉を使わずに授業を今後しないといけないよって言われたんですよ。本当にジェンダーバッシングが始まるうとしていた時期だったので。なので、教室では、ジェンダーってちょっと使えないよ、けれども、ジェンダーという言葉を使わずにジェンダーの授業をするんだっておっしゃられていて。それは、T学園に来たときに、本当に男社会だったんで、これは絶対ジェンダーという言葉、これ絶対使ったらやばいっていうような状態から始め。今は違んですけど。危機は感じて。相当鍛えられたってうか。ジェンダーという言葉を使わずに済むような教材を設定して。でも、流れはジェンダーを意識させるっていうような流れにするっていうのは、鍛えて作り上げてきた感じはしていますね。ほかの先生にも、ジェンダーという言葉使わなくても、何となく分かってきているし。なので、うちの教材は、ジェンダーという言葉が空欄になったような冊子にはなっていないですね。2学期の保育と家族と高齢者、全体がジェンダーだっていうふうな意識で作っている感じですかね。

## トランスクリプトV

G: かつては、ジェンダーという言葉を使わずにジェンダーの流れをというをおっしゃられたけども、今は？ ジェンダーという言葉を使ったほうがいいというふうにお思いになりますか。それとも、いまだにそうではないところから攻めていかないと、ジェンダーという言葉が逆に持っている、いろんな人それぞれの認識の違いみたいなことに戸惑ったり、やりにくさを感じたりすることというのが、おありになりますか。

E: まだ、あります。なので、この7年間くらいで培った、このジェンダー使わないで授業するは、今でも生きていますね。僕は、授業ではジェンダーという言葉は使わないです。本当に数人でも、もしも嫌だなんていうタグ付けされちゃうと、その生徒の生活が将来駄目になっちゃうというか、家庭科に変な偏見みたいなのを持たれちゃうのが、その生徒に、それを学ぶ生徒にとって不幸だなんていうふうな思いがあるので、やっぱり非常にセンシティブな言葉なので、できる限り使わずに授業をするという方向でやっています。

G: 使わずに、この授業はジェンダーだっというように、自分なりに年間の中に何コマ入れるかとかなんです。それとも、全てのいろんな衣食住全てのところにジェンダーに関わるところって、もちろんあるわけだからという形の流し方ですか。

E: 広く言っちゃうと、僕の存在自体がジェンダーみたいなところもあったりするんですけども、僕が家庭科という、まだ男性家庭科教師なわけじゃないですか。まだ言われているみたいな感じなんですけれども、でも、まだ言われているっていうことは、もう僕の存在自体が、ジェンダー的なタグが付けられてしまっているところもそうです。男の子が実際に宿題とかで、家庭で料理するとか、そういったところもジェンダー的な意味合いはあるんですけども、それをジェンダーというタグを付けてしまうと、何か違う方向に行くような感じがしちゃって。なので、急にジェンダーという言葉が付くと、政治的に絡め取られてしまうみたいな感じがして。それより僕は、生徒が将来よりよい生活に、どうふうな生活を送るのか分からないから、彼らが、生活のことを考えるときには、なるべくニュートラルに考えてもらったほうが生徒の将来のためになるのかなというふうな。今のトレンドを教えるてもしょうがないのかなというふうな思っていて、僕の中で。なので、なるべく、何となくずと教えられるような内容がいいよねというか。そんな感じでしょうかね。

## トランスクリプトVI

F: C先生はどうですか。

C: 私にもジェンダーの授業、何かやっているかなって思い返してみても、特別これがジェンダーの授業ですっていうのはないんですけども、各所にエッセンス的に散りばめているイメージで自分はやっているつもりです。例えば中学生とかだと、性別役割分業じゃないですけど、家事の分担のところとかを家族の話でやったり、高校生になると、法律の問題と絡めて、選択的夫婦別姓の部分、これが何でいつまでも夫婦別姓にならないのかなみたいな話を必ずして、海外の事例とか、新聞記事で、夫婦別姓にしたいから事実婚で暮らしている人の事例とかを話して、みんなは、それについてどう考えるのみたいな話をしたりとか。あとは、育児休業の話もそうです。毎年、生徒の意見がちよとずつ変わっていつかなくなっているのを感じていて。(中略) こういうに考えている子もいるし、みんなはどう思うのみたいな形で話をしたり。給与格差の話とかはリアルにしますね。実際に、自分というか、同世代の子たちで、これぐらいの給料、平均だと、これぐらいもらっているけど、女の子、男の子でこんなに差があるの、どうなのみたいな話をして、そういうところから社会問題とつなげていて、今、ジェンダーが平等にならないのって何が原因なのかなみたいな形で、家庭科の学習を通して、ほかの教科のモチベーションとかにもつなげていたり。将来、自分がどういう立場で、どういうことをしていたら、世の中を変えていけるのかなみたいなふうに考えてもらえたらいいなと思って。多少なりともエッセンスになるようなことを言っています。

H: エッセンスにしているのは、何か理由があるんですか。生徒に反発を食らいそうだから、あんまり直接的には扱わないんだとか。その辺はどうなんですか。

C: でも、実際それはあります。自分としても、逃げていた部分は若干ありますね。あんまりストレートにジェンダー、ストレートな球を投げると、子どもたちも、おお、この人、こういう感じねみたいな。はい、はいって、ちよと引かれるのも嫌だ。嫌だっていうと変なんですけど、入るものも入らなくなっちゃうので、いろんな場面で、こうだよねっていうことをちよとずつ言っていて、少しずつスポンジに染み込ませていくという形ですかね。だんだん。最初は、結構ストレートにパーンと言っていたんですけど、それだとあんまり効果ないんだなと思って。子どもたちも、この先生はこういう感じだから、そのとき、うんうんって 言っけいんだよみたいな感じになっちゃうのもよくないなと思って、こういう意見もあるけど、こういう意見もあるよねというを一応、両方持ち上げて、でも、私はこう思うよって話をするように気を付けています。

H: じゃあ、C先生は、自分はこう思うよっていうのは、割と生徒に言っちゃうんですね。

C: 言うように気を付けるようになりました。前はほかしていたんですけど、やっぱり自分の意見を言わないと、生徒の腑に落ちないみたいなことを先輩の先生にすげい言われて、そういうもんかなと思って、何となく自分の意見も、最近はずきり言うようになりました。

H: それで変わりましたか。生徒の反応とかは。

C: どうなんですかね。それによって変わったのか、時代が変わってきたのかっていうのは、ちよと分からないんですけど、でも、前に比べると、問題意識を持った生徒が増えたなとは思っています。

## トランスクリプトⅦ

H: 今の家庭科のほかの先生たちにアドバイスとかするとしたら、どんなことを言ってあげたいですか。

D: 自分は、家庭科教員としては、自己開示をたくさんしていったほうが、すごく距離も近くなれるし、フラットに意見を言ってくれるっていうのが。ほかの授業だと、ばりばり教師と生徒っていう感じの場面が多いんですけど、人と人としてしゃべれるっていうのが家庭科のすごいところだと思うので。今、教師じゃなくて、本当に人として伝えるし、聞くっていうのができるのが家庭科のいいところなので、そこを楽しんで思えたらいいんじゃないかなと思います。

## トランスクリプトⅧ

C: それはすごく感じますね。ただ、先生たち、同僚の先生たちも少し変わって、やっとな変わってきたかなっていう感じがあって、周りの大人が結構変わらないと、子どもたちが変わるの難しいのかなっていう気持ちは少しあって。どうしても、うちの学校は、本当に男の先生が多くて、古くからずっと勤めている先生も多いで、結構、不平等なんですよね。ジェンダーは全然駄目なので、そこが先生たちが少しずつ変わってきたかなって思うので、それもありますね。

H: 先生たちが変わったっていうか、C先生が変えたって感じですか。

C: どうなんですかね。ちょっと市民権は得てきたかもしれないですね。家庭科の専任が前はなかったので。そういうところもあるかもしれないです。

## トランスクリプトⅨ

F: 初めて赴任してからどんな感じだった？ 学校によって違うでしょう。

D: R高校では本当に各中学校の最下層の子たちが入ってくるような学校で、ただ、そんな暴力的っていうか、たばこ吸うとか、そういうのはあんまなくて。陰湿ないじめだったり、そういうのがたくさんあるような学校でした。まずジェンダーとかに関しては、本当に自分が恩師の先生から大学で習ったこととかをやるんですが、あんまり響かないっていうか。自分のその当時、教え方も多分悪かったので、あんまり手応えがなく、1年間過ごしたっていう感じでした。あと、誰も勉強しないような学校だったので、まず難しいなと思いつつ、ずっと迷いながらやっていた1年でした。次、O農業高校なので生活科学科っていう女子40人の1クラスがあって、そこで家庭総合とかフードデザイン、ファッション関係とかっていう、専門科目ばかりやっているような学校で、家庭総合って言うても名ばかりで、生活科学科の子たちは検定ばかりやっているような感じで、すこいつまらなかつた。あんまりジェンダーとかにはなかなか触れられなくて、自分の好きな授業ができなくてっていうような形でした。その後、O高校に異動して、ここに行って初めて自分の思うように、ちょっと好きなように授業構成できてやってきました。生徒も質が高く、返ってくるものも大きくて、結構いろんなジェンダーのこととか、食料自給率のこととか、自分がこういうふう考えてほしいなって思うこと以上に、いろんな角度から、じゃ、これはどうなんですかとか、そういう新しい質問とか、新しい考え方とか、見方っていうのが出てきて、すこいやりがいがありました。楽しかった1年ちょっとでした。そこからずっと今のM高校でやっています。この学校では生活福祉系列っていうコースがあって、そこで専門的なことをやるので。自分も長くなってきたのもあって、新しめの2日目、3日目の先生とかが主に家庭総合とか家庭基礎とかっていうのをやっていて、自分とか年配の先生が専門科目を多く持つっていう感じなので。正直、検定とか嫌だなと思いつつ、もっと普通の共通科目、家庭基礎とか家庭総合とか、もっといっぱいやりたくなって思っているところです。

## トランスクリプトⅩ

F: 家庭科の先生って、自分の生き方っていうのがすこい問われちゃうっていうか。

A: それ、すごいN高校で教えているときに、やっぱり思いました。O高校のときは、まだ若かったのもあるし、自分の生活の失敗談とかいっぱい入れていたりとかしたんですけど、やっぱりだんだん、N高校とかの子たちはデリカシーがなかったりとか、必要以上になれなれしく踏み込んできたりして嫌な思いもしたので。自分の私生活を授業のネタとして切り売りすると、自分が、気持ちの波によって平気なときもあれば、すごく傷つくときもあるから、生活を切り売りする授業づくりはやめようと思って。H高校の子たちって、遠慮するところとか空気読むところがあるので、聞いちゃいけないかな、聞いたら失礼かなっていうことは、やっぱりそんなに触れてこない。楽といえば楽ですし、でも、突き詰めて一緒に何か探求していると、なんか難しいなと思いますね。そして、さっきのジェンダーギャップ指数とかと、生徒たちが考えるジェンダーの価値観、思っているものが違うっていうのは、生徒会の先生とかが、ジェンダー平等をテーマとした動画を生徒たちが作るうとする際に止めるのは、結局、同性愛を認めようみたいなふうな内容になりがちなんだと思ってるからなんですよ。

#### 4. 結論

本研究の成果は次の四点である。

第一に、生徒の中には、ジェンダーという言葉に鬱陶しさを抱く生徒がおり、ジェンダー平等教育に忌避感を持つ生徒がいることが確認された。その背景にはすでに生徒には性の多様性は当たり前という認識があることが窺えた。

第二に、家庭科教員はジェンダー・センシティブな教育を行っていたことが確認された。家庭科教員は生徒が性の多様性についての理解があると感じる一方で、ジェンダーという言葉に鬱陶しさを抱く生徒がいることも認識し、ジェンダー平等を表立って言うことなく、しかもあらゆる場面で配慮しながら、粛々とジェンダー平等に資する授業を行っていたことが明らかになった。各高等学校に合わせて、授業も工夫していることが確認された。家庭科教員は最終的に生徒自身の在り方生き方を考えさせる授業にしようとしていた。家庭科は生徒が真にジェンダー平等を考え生活に根付かせ、生き方に影響を与えうるものであった。家庭科教員はジェンダー・センシティブな生き方の体現者でもあった。

第三に、各学校文化による違いがあり、ジェンダー平等教育への困難さが明らかになった。高等学校の場合、各学校による生徒、保護者、教員の考え方は異なり、学校文化の違いが大きいことが確認された。家庭科教員は高等学校を移動するたびに、各学校の生徒、教員、学校文化の様子を把握して、その学校に沿ったカリキュラムの家庭科授業を工夫しなければならず、そこに、教員の苦悩や疲弊がみられた。高等学校にはコース別、進路別など、生徒にとって様々な選択肢から好きなコースを選べる良さがある半面、教員にとっては各学校文化の違いに翻弄される様子が窺えた。教員がどの学校においてもジェンダー平等教育が行えるよう心理的安全性、公平性、対話のある環境が必要であることが示唆された。

第四に、学校全体にジェンダー平等意識が共有されていれば、教員の自己開示はしやすいが、学校全体でのサポートが得られなければ、自己開示は難しく、ジェンダー平等について考えさせる授業を行うことも困難であることが確認された。また、学校全体がジェンダー平等の認識を共有していれば、前述の忌避感のある生徒の意識変容に繋がることを示唆された。

本研究の限界は家庭科教員以外の他教科教員にジェンダー平等教育への意識を問うていないことである。今後の課題は他教科教員の意識も明らかにし、共通点および相違点を探ることである。また、2024年国際標準化機構（ISO）により「ジェンダー平等と女性のエンパワーメントの推進と実施のためのガイドライン」（ISO 53800）が発行された。これに基づき、日本のジェンダー・ギャップ解消に向けて、社会全体で理解されるジェンダー平等の指針学校版を作成し、教員が安心してジェンダー平等教育を行える環境を整えていきたい。

## 謝辞

本稿は日本家庭科教育学会第5次課題研究の助成を受け実施した調査に基づくものです。ここに、記して感謝の意を表します。また、ヒアリングにご協力いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

註：本ヒアリング調査は日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会（課題番号592号）の承認を受けている。

## 引用文献

- 1) World Economic Forum: Global Gender Gap Reprt2025. WEF\_GGGR\_2025. pdf). (2025. 7. 15)
- 2) United Nations Development Programme (UNDP): 2025 Human development report. <https://hdr.undp.org/content/human-development-report-2025> (2025. 7. 15)
- 3) 内閣府男女共同参画局. (2024). 第9回報告に対する女性差別撤廃委員会最終見解 (仮訳). [https://www.gender.go.jp/international/int\\_kaigi/int\\_teppai/pdf/report\\_241030\\_j.pdf](https://www.gender.go.jp/international/int_kaigi/int_teppai/pdf/report_241030_j.pdf)
- 4) 文部省: 学習指導要領家庭科編 (試案) 昭和二十二年度. (1947).
- 5) 堀内かおる: 『教科と教師のジェンダー文化: 家庭科を学ぶ・教える女と男の現在』 (ドメス出版)、(2001).
- 6) 荒井紀子、鶴田敦子、原澤智子: 男女共学家庭科の実施と教師の意識 (第1報): ジェンダー観をめぐって一、日本家庭科教育学会誌、41 (2)・33-40 頁 (1998).
- 7) 片田江綾子: 家族教育における「倫理的な指導不安」: 生徒のプライバシー保護と家庭科教員の不安をめぐる現象学的研究. 日本家庭科教育学会誌、56(4)・194-202 頁 (2014).
- 8) 木村涼子: 『学校文化とジェンダー』 (勁草書房)、(1999).
- 9) 木村涼子: 日本の教育におけるジェンダー平等の過去・現在・未来: 中等教育に着目して、学術の動向、(27)10・68-75 頁(2022).
- 10) 齋藤美重子、阿部睦子、川村めぐみ、佐藤裕紀子、望月一枝: ジェンダー平等の家庭科ガイドブック: 誰一人取り残さない社会に向けて. (2022). [https://jahee.jp/pdf/kenkyu/kadai\\_kenkyu\\_5.pdf](https://jahee.jp/pdf/kenkyu/kadai_kenkyu_5.pdf) (2024. 8. 29)
- 11) Polkinghorne, Donald: *Narrative Knowing and the Human Sciences*. Albany: State University of New York. (1989).
- 12) Merriam, S. B.: *Qualitative research and case study applications in education: Revised and expanded from case study research in education*. San Francisco: Jossey-Bass. (1998).

- 13) やまだようこ「ライフストーリー・インタビュー」：やまだようこ編『質的心理学の方法：語りをきく』（新曜社）、124-143 頁(2007)。
- 14) 樋口耕一：計量テキスト分析およびKH Coder の利用状況と展望. 社会学評論、68 卷・第 3 号・334-350 頁 (2017)。